

教 仏 名 聞

第26号
(発行日)

2012年11月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

今何をなせばよいのか

掃除そうじをしたり、食事を作つたり、畑を耕たがやしたり、会社にいたり、孫の世話をしたり、あるいはテレビを見たり、新聞を見たり、散歩をしたり、

そうしながら、月日は過ぎ去り、時は流れていく。

大事な人生であり、二度とない人生でありながら、日々が速やかに終わっていく。人生は終わりに向かい、死に向かっている。

こういう日々の中、「いったい私は現在、つまるところ何をなせばいいのか」「いろいろなことをしているけれども、これでいいのだろうか」と、戸惑とまどい悩む。

こういうような問いかけが心の底でささやいてはいないであろうか。

「私は本当のところ今何をしたらいいのか」。こういった問いも私たちは問われている、あるいは問うているのではなからうか。

ということはない」ともいえずに今ここに本当に落ちついていないのではなくて、現在は腰を一時的に掛かけているだけという不安定な感じのなかで生きている。

そして「所在がない」ということは何かしら、セカサレているような、あるいは何かかに追われているような感じがするのではないか。その理由の一つは死からの圧迫を受けているからであろう。

もう一度言おう。「日々は速やかに過ぎ去っていく。私の人生はこのまま終わっていくのか。私は何を今なすべきなのか。それが分からない」と。

こういう問題を私の問いとするとき、「ここに道あり」と知らして下さる言葉がある。それは『仏説無量寿経』に釈尊が説きたもうた本願の思召しの言葉である。この經典の中で、釈尊は

「汝、ただ今、念仏申すべし、阿弥陀仏は、今ここで何をなすべきかと悩む汝に「我が名を称えよ」と仰せ下さり続けているのだ」と(意)と。

「我が名を称えよ」。この阿弥陀仏の仰せが、いつでもどこでもの私にそがれている。(阿弥陀仏とは、量はかりないのちと慈悲と智慧の働きであり、真実そのものである)今このお言葉を聞き、南無阿弥陀仏と称える。

「我が名を称えよ」の仰せに、そこに「私は今何を本當になせばいいのか」という人生における今の問いが答えられている。

「我が名を称えよ」との阿弥陀仏からの告知を今受けている(そのような現在)を私たちは生きている。そのよう

《 念 佛 寺 報 恩 講 》

十二月二十二日(土)

午後二時始

ご講師

大谷大学名誉教授(仏教学)
三 桐 慈 海 先生

*なお、同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

な現在をこそ私たちは生きている。そういう「現在」であることを知つていようとなくろうと、私たちはそのような有難い時を今生きているのである。釈尊はそのことを教えて下さっている。

「我が名を称えよ」は凡夫の言葉ではなくて、私たちに今かけて下さっている阿弥陀仏ご自身の言葉である。この仰せを聞く時、おのずから南無阿弥陀仏と称えざるをえない。

そこにおのずと「私は今何をなすべきか」に応じていることになっているのである。今、「我が名を称えよ」と聞き、南無阿弥陀仏と称える。これが一切である。

正信偈に学ぶ同答

(四十七)

三不信誨懇懃 像末法滅同悲引

〔我が名を称えよ〕とは〔汝のすべての責任を引受ける〕であり、〔汝を助ける〕の仰せであり、〔称えるばかりでよい〕との大悲のお心である。本当にすべきこと、それは南無阿弥陀仏と聞き、南無阿弥陀仏と称えること、それで完結しているのである。

南無阿弥陀仏と聞こえるものこそ私が求めるに先立って私に与えられている真実である。私に聞かされる大いなる大悲の真実である。

〔私は今何を結局は求めたいのか〕を問う前に、求むべきものはすでに今ここに与えられているのである。それを告げ知らせて下さるもの、それが南無阿弥陀仏の一声である。

〔我が名を称えよ〕を聞く、そこに私の居り場が与えられていることを知る。

〔我が名を称えよ〕とは「汝を引受け、汝を撰め取り、汝を離さない私がいる」との阿弥陀仏の仰せである。この仰せ下さる働きが私とともにまします。

ここに、業の深い、罪の重い、愚かな私が、私のままで阿弥陀仏に受け入れられてい

ることを知る。許されて居らせていただいていることを、端的に知るのである。たとえば悪業を止められなくても、〔汝罪深き者よ、今、我が名を称えよ〕の撰取の大悲がそがれているのである。

この居り場において、掃除をするもよい、畑仕事をするもよい、人とおしゃべりするもよい、テレビを見るのもよい、商売をするもよい、ボランティアをするもよい、デモンストラに参加するもよい、のである。どういうことをしようとも、阿弥陀仏の大地に根づいた明るい人生が与えられているのである。

阿弥陀仏はつねに私たちに関わりを持ち、私たちに〔我が名を称えよ〕と喚びかけておられる。

この関係が私たちの人生と歴史の基礎である。

それに応答し続けている姿が専修念仏である。元祖の法然聖人も、宗祖の親鸞聖人も専修念仏の行者でありたもうた。今、今に応答し続ける生活がおのずと専修念仏の生活になるのである。応答しているとは唯称え、ただ聞いてい

書き下し（三不信の誨、懇懃にして、像末法滅、同じく悲引す）

現代語訳（道綽禪師は三不信と三信の教えを懇切に示し、正法・像法・末法・法滅、いつの時代においても、本願念仏の法は変わらず人々を救い続けることを明される）

（語釈）三不信——三信でない心のこと。それは淳朴でない心、一心でない心、相続しない心のこと。三信——三不信の反対で、淳心、一心、相続心のこと。

*

N 「三不信のお話ですが、三信のなかの淳心については先月お話し頂きましたので、今回は一心と相続心についてお話し下さい。では一心とは」
D 「これも信心の姿をいわれたものです。信心は、〔汝をそのままなりで助ける〕という阿弥陀仏のお心をその通り

に受けとっているわけですから一つ心です。阿弥陀仏のお心のままが私の心に届いて信心となつて下さるのですから一心といわれるのです」

N 「仏の仰せに対して私の考えをさしはさまないのですね」
D 「ええ、阿弥陀仏のお心に對して私の思いや考えを立てると、仏の心と凡夫の心とが並び立ち、二心になつてしま

います。これが不信の姿です」
N 「信心が一心にならないことについて、曇鸞大師は〔信心一ならず、決定なきがゆえなり〕と言われていますが、決定がないとは」

D 「阿弥陀仏の〔汝をまるまる引き受ける〕という絶対的決定が届いて私の心に定着せしめられる、これが信心です。阿弥陀仏の決定を聞いて、それから私が自分で判断して決定することではありません。阿弥陀仏の〔汝を助ける〕の

大悲の決定が、私の思案や分別を通さずに、そのまま私に貫くのです」
N 「阿弥陀仏の決定の外に信心がないから、一心なのですね」
D 「ええそうです。このように私の側からの〔これでよい〕〔これだから助かる〕〔これで間違いはない〕というふうな私の決定（判断）に依るのであります。そういう凡夫の側の判断に依る決定はいろんな縁によつて壞れます。たとえばほかの権威のある人なり先生なりが、私の信心に對して〔それではだめだ〕〔そういうのは信心ではない〕などといわれるとぐらつきま

す」
N 「自分が自分に対して〔これでよい〕という確信は、私の判断が中心になつていての

です」
D 「ええそうです。それは自分の考えに過ぎませんから、危ないものです。真実の信心は阿弥陀仏の仰せ（大悲の絶対命令）がそのまま私の信心の内容ですから、仰せの外に信心はありません」
N 「それで信心は一心であるといわれるのです」
D 「ええ、ですから阿弥陀仏の決定のほかに自分の考えを

の決定のほかに自分の考えを

頼みにすると、二心になりま
す。それはまだ自分の思いや
考えやらが助けに間に合う
ように思っているからです」

N 「では相続心とは」

D 「阿弥陀仏のお心が私に届
いて私の心と離れずにもに
いつでもましますことです。

信心は一度私の心に発起する
ともはや消えないのです、断
絶しないのです。不思議です」

N 「そうすると反対に、届い
たようでもしばらくすると断
絶して、阿弥陀仏の大悲心が
感じられなくなってしまうた
りするのは、それは真実の信
心ではないのですね」

D 「ええ、一度阿弥陀仏にで
あうと、この世の人生の全て
の事は流れ去っていつても、
阿弥陀様のお心は相続して、
常にともまします。それを
相続心といいます」

N 「相続心にならないのを曇
鸞大師は「信心相続せず、余
念間つるがゆえに」と仰せら
れてますが、これはどういう
ことですか」

D 「この「余念間つる」につ
いては『御文』に「余のかた
へこころをふらず」といわれ
ていますが、余のかたへこ

ろをふるとは、阿弥陀仏のみ
を憑（たの）まず、ほかの仏
や菩薩や神々などに心をよせ
たり祈願をしたりすること
です」

N 「『御文』では、余のかた
へこころをふらず、一心に弥
陀をたのめと何度も仰せられ
ていますね」

D 「ええ。もともと阿弥陀仏
をふたごころなく憑む信心で
ないなら、阿弥陀仏以外のさ
まざまな仏菩薩や神々を頼み
にしたり、あるいは自分の持
ちもの（知性や能力や道徳）
などを頼みにする心がまじり
ます。なお阿弥陀仏を「憑む」

の「憑む」という意味はおま
かせする、ゆだねると云う意
味であって、依頼するとか請
願するとか祈願するという意
味ではありません」

N 「阿弥陀仏をひとえに憑ま
ず、他のものを頼みにするこ
とが、余念を間てることにな
るのですね」

D 「ええ、あるいはこうもい
えます。一度は阿弥陀仏
の大悲心が届いたようでも、
「これでいいのだろうか」へこ
うも考えられる」

「あの先生
はこういわれたがそちらが本
当ではなかるうか」などとい
う自分のさまざまな想念や考

え、そういう「余念」が間に
まじわり、それによって動揺
したり、信心が不確かになっ
たりしてしまう。それは、余
念が間てて信心が相続してい
ない姿です。それは真実の信
心ではないからです」

N 「それで「淳心、一心、相
続心であるような信心がまこ
との信心といわれ、それをね
んごろに説いて下さったのが
道綽様なのです」

D 「ええそうです」

N 「では「像末法滅、同じく
悲引す」というのはどういう
意味ですか」

D 「それは、像法の時代も末
法の時代も法滅の時代も、何
時の時代でも、阿弥陀仏の本
願念仏は、平等に衆生に大悲
をかけて涅槃（浄土）に導き
入れて下さる、と道綽様は教
えて下さったと聖人は仰せら
れるのです。引というのは引
入するということで、涅槃の
領域へ引導し入れたもうこと
です」

N 「なぜ、同じく悲引するこ
とが本願の念仏はできるのだ
でしょうか」

D 「本願の念仏は、衆生の側
に涅槃への条件を求めない、
ただ阿弥陀如来様の力一つで

救いたもう法だからです。で
すから時代の有様とか、衆生
の煩惱や悪業というようなさ
まざまな負の形態によつてさ
またげられない救いですが
ら、いつの時代も、どのよう
な衆生も浄土に生まれること
が可能なのです」 (了)

《住職雑感》

小学校の高学年になって、いわゆる「祭
り」の後になんともいえない悲哀を感
じたものである。「祭りの後の悲哀」
と言えば、近くの神社の秋祭りの後の
淋しさとか、学校の賑やかな運動会が
終わって最後に運動場で整列をした時
の悲哀感は今でも思い出す。ことに小
学校の修学旅行で奈良から京都に行
き、京都見物を終えて、非常に楽しか
った旅行を終えていよいよ地元へ帰る
前の晩、暗い中を皆とバスに乗ってい
た時にふっと起こった淋しさというか
悲しみというか、何とも言えない感情
がどつと湧いたのを今だによく憶えて
いる。「はかなさ」とか「夢・まぼろ
し」とか「むなしさ」という感情、そ
れを近年強烈に感じたのはインドのパ
ラナシに行って、ガンジス河を朝早く
舟で岸辺の沐浴風景とか火葬場などを
見ていた時である。どこかの河岸のス
ピーカーからメロディが流れてきた。
そのメロディの何ともいえない情感、
それがまさに「人生の空しさ・はかな
さ」を濃厚に奏でる、口では言えない

音色であった。ああいうメロディは日
本の街中では絶対に聴くことはない。
やはりインド、しかも三〇〇〇年来の
宗教都市といわれるバラナシであつて
こそである。イスラム教で礼拝の時間
を知らせる声が街に流れるのを聞くと
これも悲哀感情がゆたかである。また、
バッハの音楽が非常に魂を揺さぶるの
はなぜか。グレン・グールドが「バッ
ハは悲哀感あふれる多くの曲を創つ
た」といったが、その点にあるのでは
なかるうか。山折哲雄氏が「日本の今
の若者は歌謡曲を聴かなくなった。へ
かない」とか「むなし」とか「夢・
まぼろし」とかの歌詞を曲想に表して
歌う歌謡曲は日本人の宗教心を養つて
きたのに」と嘆いていたが、歌謡曲が
そういう役目をしていたのかと改めて
知らされた。悲哀感はその縁として
永遠なるもの、はかなくない真実を求
めることに人を誘い向かわしめる。釈
尊が若い頃に「老病死」を問題にして
出家されたというが、老病死の苦しみ
とは、老いて死んでいく人生にたいす
る深い悲哀感ではなかつたらうか。西
田幾多郎が「悲哀感から宗教が起こつ
た」と書いているが実際そうだと思う。
はかないものがあれば、逆にはかなく
ないものがある。むなしいものがある
ばむなしくないものがある。夢・幻の
ようなものがあれば逆に真の実在があ
る。阿弥陀仏とか浄土とあらわされて
いるものは、そういう常住なる真実在
である。 (了)

木村無相さんの法信6

(昭和五十七年六月十一日付けの木村無相さんから私へのお手紙。前月号からの続き)

つづいてお手紙に

この道を往けとお勧め下さる人が現代の教界には大変少ないと、心細くも感じます。

とあるが、ナニも「現代の先生」がたばかりたよらなくてもいいではありませんか。七百年ムカシに、スデに親鸞聖人あり、法然上人あり、その前、善導大師あり、お釈迦様あり、「阿弥陀経」には六方、十方の諸仏がスデに確信をもつて、大声で勧めて下さっているのですから、「現代の教界」や先生がたがどうあるうとかまわないではありませんか。

「就人立信」といっても、はたして「現代の先生がた」を「就人立信」できますか。

私は香樹院師、松原先生、金子先生についてよく言い、書きますが、さて「就人立信」ということになる親鸞聖人、法然上人、善導大師、お釈迦さま、根本は如来さまーそれで十分、十二分ではありませんか。

『歎異抄』第二条で、
いづれの行もおよびがたく、とても地獄は一定すみかぞかし

(ダメということは、一生、万生の未来までダメで)

弥陀の誓願マコトにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず、仏説マコトにおわしまさば、善導の御釈一法然の仰せソラゴトならんや、親鸞が申すムネまでもムナシかるべからず候、詮ずるに愚身の信心におきてはかくの如し

とあるが、弥陀、釈迦、善導、法然、聖人が、確信をもつてお勧めがあれば十分、十二分ではありませんか。

現代の先生がたがナントいわれようと、迷うコトはいらないと思います。

もちろん、あの先生、この先生にもそれぞれありがたいところはありますが、それではその先生のどなたに「就人立信」できることでしょうか。

たとい法然上人にすかされまいらせて地獄におちたりともさらに後悔すべからず候と断言出来るほど。

その点、私としてはいろいろ迷いに迷ったあげくに、

親鸞聖人こそ、私の「就人立信」のお方です。そのほかのお方はどれほどよいこと、ありがたいこと言っておきても「就人立信」の「人」とはいえませぬ。もちろん私としてはです。

法然、善導さま、ドナタでもよいです

が、と申しても、私は法然上人、善導大師のものを少しも拝読してないので、私における「就人立信」のお相手は親鸞聖人ということに結局は決定されました。ホカの方のおさとしはおさとしとして。紀さんは紀さんで「就人立信」といえる、お方が決まるというですがねえ。

さて「就行立信」の方でいえば、「ただ念仏」しての「お念仏」であります。

「ただ念仏してミダに助けられまいらすべし」とよき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなりの「就人立信」の聖人、また『第二條』のおわりにこの上は念仏をとりて信じたてまつらんとも

と「お念仏」を行として「就行立信」されていられますねえ。

法然上人を「就人立信」される親鸞聖人また

「ただ念仏」「念仏」を「就行立信」されていられます。

「就人立信」のよき人は、ただ念仏せよと「就行立信」されていられます。

紀さん、「就人立信」のよき人、また「就行立信」のお方で、両方別々ではないのでありましょう。

紀さんー重ねてお勧めします。あの先生、この先生でもよろしいが、もうよい加減に「就人立信」の「人」を決めてもよいかと思うことです。

(続く)

【電話相談室】
(秘密厳守・匿名可・無料)
(時間) 午前8時より午後10時まで
(電話) 0798-20-2112
(相談内容) 人生上のいろいろな悩み・信仰上の相談・仏事の相談
*相談員が留守の時が多々ありますので予めご承知下さい。

《《**帰敬式**》》 念佛寺にて
二〇一三年一月二十二日(火)
(午後二時より)
*おかみそりです。ご希望の方は今年中に申し込んで下さい。費用は一万円です。法話の後に執行致します。法名授与。

《《**聖典共学会**》》
毎月六日(午後七時始)
担当 住職
*テキストはこちらでコピーできます。

《《**真宗入門講座**》》
(お勤め練習と正信偈の学習)
毎月十八日(午後六時半始)
担当 (副住職) 土井尚存